

## 青服の老人は、かくしやくとして求めるのだ

例えば、青つ涙をたれて、かわいた鼻水で袖口を固まらせた少年、あるいはガキ大将と呼ばれる少年が、僕たちの社会からいつのまにかいなくなってしまうように、老人たちのある種の類型も淘汰された。

伝統的な価値観や知識が砂のように崩壊して、急激な社会の変化に適応しうる順応性、あるいはそれ自体としては何の意味もない抽象的な若さというものが価値として浮上する。老いはアパートの独居生活や老人世帯へと遠ざけられ、年金生活や福祉の枠組みにひっそりとその生を囲う。あるいはゆとりのある老いは老後保障や預金残高に裏打ちされて、孫たちのかわいいしぐさに自足する。スポーツやファッションなど、失われた若さを模倣し、あるいは円熟した老いのスタイルを姿見に映し、あるいは清潔な大病院のロビーで病的兆候に脅え、あるいは安堵し、あわてたようにその宗派の感情に身を沈める。

老いさえも抽象的なのだった。

かつて生活と切り離しがたく結び付いていたウンコや小便が即時に隔離され、脱臭され、処分されるように、具体的な身体はますます抽象的なシステムに依存し、その度合いに従って抽象化されていく。抽象的な身体を自己イメージが囲う。裸体は具体的な身体というよりもむしろ自己イメージの劇場、その抽象的な単位なのだ。そして自己イメージの密やかな内部には抽象的なシステムから追いつめられた生理が、圧倒的な無意味としようごめいている。感情さえも抽象的にならざるをえない。それは抽象的なシステムとリンクし、ベクトル分解されたのちに回収される。システムによって回収されない感情は放棄され、再び無意味としての生理の領域に追いつめられる。現代人としての僕たちはつねに感情をコントロールし、従ってつねにコントロールされた感情によってコントロールされている。コントロールからこぼれ落ちた感情、いわば感情の無意味な残骸がつねに微かな基調低音としての欲求不満として僕たちの生活にはつきまとい続けている。

※

漢口（ハンコウ）客運駅の棧橋に降り立ち、乗客たちの流れに押されるようにして客運駅の出口に立った僕は、すぐさま買い求めた地図を片手に、さてどうしようかと、ぼんやり思索していた。目の前を乗客たちが通り過ぎ、リキシヤの男たちやミニバスの呼び込みたちは客をつかまえようとして大声を上げたり、つかまえた客をせつせと案内したりしていた。

開放経済の恩恵を全面的に受けて都市の近代化を急速に推し進める沿海地方から少し内陸部に入った武漢の第一印象は、もちろん湖北省第一の都市ということもあって発展した大都市のだが、浮き足だったところは少なく、どことなくすんでいて、またどことなく汚れた感じだった。といって、僕は別に悪い意味で言っているわけではない、むしろ人間的な臭いが強くて、好ましく感じたのだった

客運駅の壁にもたれて、とにかくミニバスで武昌（ウーチャン）の方へ行ってみようかと考えていると、何やら青服の老人が声をかけてくる。青服（青い人民服）はくたびれた作業服といった感じで、前歯のない老人はいかにも年老いた人夫という印象だった。さっぱり意味が分からないのだけれども、おそらくリキシヤの客引きなのだろうと思って、無視していた。

目指す大東門飯店は漢口から長江をへだてた対岸にあり、かなりの距離があった。（ガイドブックは漢口側にあるホテルを推薦していたのだが、僕は繁華な所より少し静かな所の方がいいと思って、唯一武昌側の安ホテルとして紹介されていた大東門飯店を選んだのだった。）路線バスで行こうか、ミニバスで行こうか、それとも渡し船で行こうか、あれこれ考えているあいだも青服の老人はしきりに何かを話しかけてくる。

「リキシヤで行ける距離ではないだろう」と考えながら、あきらめさせるつもりで地図を指し示しながら、

「大東門飯店（タートンメンファンテン）我想去大東門飯店！」と老人に告げた。

老人は僕の目的地を聞くと、心得たようについて来いというそぶりをしながら何事かを話しかけてくるのだが、僕には少しも分からない。たぶん北京語の発音とは異なるこの地方独特の発音が混ざっているのだろう。とにかく、タクシーの運転手にしては風体がそぐわないし、リキシヤにしては年をとりすぎている老人が、いったいどのようなようにして大東門まで連れていくというのか、僕には分からない。

関わりにならない方が無難かなと考えて、

「不要（プーヤオ）」

と言いながら、ミニバスの方へ行こうとするのだけれども、老人はしつこく声をかけて離そうとはしないのだ。

前歯のない皺だらけの顔であまりにしつこく繰り返すので、僕は少し不憫に感じて振り返る。

老人は梅干のような顔一杯に笑顔を浮かべて「ついてこい」というように先に立って歩き始めた。しばらくして思い出したように僕の肩から重たいバッグを奪い、小さな肩に背負い込む。

かくしゃくとして大通りをしばらく歩いて、渡し船の碼頭（マートウ、乗り場）に入っていく。そこまで来て、ようやく僕は老人が案内するつもりなのだということに思い当たる。料金四角（二人分）を支払う。

長江の岸辺に据えられた栈橋へと階段をずっと下りていく途中、何事か男と男が大声で言い争っていた。いまにもつかみあいのケンカを始めそうだった。男たちのまわりを乗者たちは取り巻いて、口々に何か言葉を投げつけていた。

渡し船は内部が二層になっていて、老人は心得たように階段を上り、板を張り渡しただけの腰かけに僕をいざなう。ひっきりなしに煙草をふかしながら、僕にもすすめた。老人の煙草はとでも強くて、僕は頭がくらくらした。

二〇分ほどで武漢長江大橋の武昌側脇にある碼頭に着くと、しばらく歩いて、今度は二両連結の路線バス（料金二人四角）に乗って、二〇分ほどで大東門到着。大東門飯店の前まで来ると老人は立ち止まり、荷物を肩から下ろしながら、

「案内料は五〇元だ」と告げる。

道々「案内料は一〇元くらいかな」と考えていたので、ちよつと高いと思つて一〇元札を出して抵抗したのだが、老人は、

「ここまで時間もかかったし、これからまた戻らなければならぬ」

と、頑として五〇元を譲らない。最初に料金を交渉しなかった自分が悪いので、結局OKした。

手持ちに五〇元札がなかったので、先に大東門飯店にチェックインし、宿泊料を支払ったあと、老人に五〇元を手渡した。それを見ていたフロントの女性は「ヤッタネ！」というように老人に笑いを送っていた。たまたまカモを釣り上げたとき、老人の懐は潤うのだろう。ちなみに大東門飯店の宿泊料は二泊で五〇元だった。

カモにされたくやしきよりも「あっぱれなじいさんだ」という感心の方が大きいのだった。

そのように老いも若きも、男も女も、開放経済という大きな流れをあとへ行ったりこつちへ来たり、まさにうごめきあいながら、ほとんどその体だけを資本にして、生き抜いているようだった。とても具体的な中国人たちがいた。とても具体的な感情と生活があった。それは何か抽象的な存在に身も心も貫かれているかのような僕には感心する他ないものだった。

ある人々は中国人のパワーということを口にする。中国を旅行してき

た人も、在日の中国人たちに接している人も、あるいは中国貿易に従事し、中国と日本を頻繁に往復する知人も、一樣に口にするのは中国人たちのパワーやエネルギーのことだ。それはもしかしたら中国人たちの存在の具体性ということから発しているのではないかと僕は思う。中国人に比べると、僕たちはなにはともあれはるかに市民だ。あるいははるかに会社員だ。僕という具体的な存在として生きているというよりも、むしろ市民として、会社員として、消費者として生きている。そのような抽象性が繁殖して、具体的な人間が衰弱すること、具体的な存在としての手ざわりが希薄化するということが、それは必ずしも良いとか悪いとかいう問題ではないのだからうけれども。

ホテルでしばらく休憩したあと、昼過ぎに漢陽（ハンヤン）にある帰元寺（クエイイエンスー）の方へ向かった。

（武漢という都市は湖北省の省都で大都市なのだけでも、もともとは漢口、漢陽、武昌という「武漢三鎮」と呼ばれた三つの都市で、それらが合併して現在の武漢市になっている。長江はその真中を南西から北東に流れ、その西北は漢口、南西は漢陽、東は武昌という位置関係になっている。商業都市としての武漢の中心は漢口、武昌には省政府などの政治機関や武漢大学などの学校が多い。また漢陽はこれら二地区に比べるとへんぴな印象だ）

黄鶴楼のある蛇山の脇で路線バスを乗り換えて、武漢長江大橋を渡り、漢陽火車站で降りる。売店でパンとジュースを買って、歩きながら食べた。しばらく道に迷い、鸚鵡大道を見つけて、ようやく地図と現在位置とが一致する。

鸚鵡大道の歩道を歩いていると公園があり、公園脇の歩道上には盲の人々が一メートルおきくらいに座り込んでいる。それぞれの前に五〇センチ四方ほどの、墨で何やら文字や図形を書き込んだ紙を広げて。どうやら占いのようなものだけれども、一〇人ほどの同じような盲の人々が同じように占いの「店」を出して歩道に座っているというのは、何か異様な感じがした。だが異様なのは光景ではなくむしろ感受性なのではないかと、ふと僕は思う。

鸚鵡大道をしばらく行くと、漢陽大道との交差点に、大きな陸橋があり、そこから漢陽大道に沿って繁華街が続く。

歩道にはたくさんの物売りたちが店を広げていた。小さなテーブルや歩道に直接敷いたビニールシートの上には、衣類やサンダルやブラジャーやパンティーストッキングなど様々な日用雑貨が並んでいた。あるいはアイスクャンディー売りや食べ物屋台、果物の露店などが所狭しと

ひしめきあっていた。

人々の雑踏を避けながら歩道を歩いていると、突然、物売りたちのあいだに緊張した空気が走った。ある者たちはビニールシートの端を持って店仕舞のしぐささえ見せる。誰もがひとつの方向に緊張した視線をくぎ付けにしていた。

おそらく官憲の取締りを恐れたのだろう。しばらくすると緊張した空気がほどけて、物売りたちは何もなかったようにそれぞれの商売に励むのだった。

漢陽大道から横道に入っていくと、自由市場だった。数メートル幅の辻の両側には野菜や果物は言うに及ばず、鶏、ひよこ、ザリガニ、卵、台湾ドジョウ、蛇、豚足、豚耳など様々な食べ物を並べた店が延々と続いて、買物客でごったがえしていた。

自由市場の雑踏をゆつくりと通り抜けて、帰元寺へ。

一変して静かな境内には木立に囲まれて、藏経閣、念仏堂などの建物がひっそりとそびえていた。仏像の前には『仏光普照』と記された赤い幕が垂れ下がっている。中国人たちは両手で持った長い線香の束を上下に振りながら、あるいは仏像の前に置かれた丸い座ぶとんに膝まずいてお祈りをする。

僕は仏像の前で静かに手を合わせるということが決して唯一の自然なふるまいではないのだと納得する。形はそれぞれでも祈りとしては同じなのだ。だが、形として異なる祈りの中身がどうして同じなのだろうか。むしろ形としての差異はその祈りの中身の差異を現わすと考える方が自然なのではないか。

静かにお祈りをする中国人たちの脇を通り抜けて、いくつかのお堂をまわり、羅漢堂へと入っていった。漠然と、僕は日本の五百羅漢、風化にさらされながら辛うじてその表情を留める石彫りの五百羅漢を思い浮かべていたのだが、帰元寺の五百羅漢は等身大よりも少し小さい僧たちの座像で、様々な表情をした僧たちは、悟り、苦悩し、あきらめ、居直り、異様なほどリアルで圧倒的なのだった。そのリアルさに比較すると日本の五百羅漢は一度仏としての類型化を通り抜けたものようだった。

類型化（あるいは洗練と言ってもいいかもしれないが）以前のリアリティー、そして金メッキされたかのような金色の仏像、それらはもしかしたら中国人と日本人の祈りの差異を端的に表現するものなのかもしれない。

例えば、現実主義の中国と自然主義の日本というように考えてみる。中国人のあいだには彼岸とか極楽浄土とかいう考えは薄いのに対して、日本人は自然のそこそこやその内奥に彼岸というものを感じているのでは

ないか。中国人は僧その人を祈るのに対して、日本人は僧その人の向う側、僧その人が象徴するもの、いわば彼岸に対して祈る。

しかし当てずっぽうの思考はそのくらいにして、先を続けよう。

帰元寺を出た僕は、先ほどの自由市場を通り、その一角に店を出していた屋台で肉絲面（一・三元）を食べた。漢陽大道のバス停から路線バスに乗り、漢口のメインストリート、中山大道を経て三陽路へ。そこから長江沿いのバンドを歩いて、濱江公園へ入っていった。すでに夕刻近い時間だった。星期一（月曜日）の夕刻。平日夕刻の、ほっとしてたらずんでいるようなゆったりとした時間だった。

長江川辺の広場では、たくさんの人々が凧上げに熱中していた。燕のような形をした凧だ。遊歩道のベンチには若い恋人たちが語らっていたり、抱きあっていたりした。空いたベンチに腰を下ろして、武漢の空にくぎ付けにされたかのように、その空のはるか一点に動かない凧を眺めていた。「遠く、遠く、もつと遠く」と僕は思う。

けれども、それは測定できる距離のことではないような気がする。行って帰って、あるいはぐるりとひとまわりして、そのとき感じる後先のズレのようなものかもしれない。行っても行かなくても同じなのかもしれない。だが、同じであると言いうるのは行つた者だけだ。行っても行かなくても同じだという言葉が行かなかった者から発せられるとき、行つた者はその言葉にうなずきつつも、微かなズレを感じるだろう。そのズレを言葉にすることはできない。それはとほうもない距離、地図上の距離によっては決して測定できない距離なのだ。

公園のベンチで、煙草を吸いながら、僕はその距離を今歩いているという気がした。それは煙草をもみ消して、濱江公園を再び歩き始める、その具体的な一歩であるとともに、どのような測定にもかからない唯一の一歩、交換不能な距離なのだ、僕は思う。

（そして今現在、この報告を書き記している僕は、その距離をなんとかして表わそうとしているのかもしれない。この報告は、決して未知を伝達しようとするものではなく、また旅の情報を伝えるということを意図するものでもない。いわば、行っても行かなくても同じとしか言いようのない虚数としての距離を、僕は表わしたいと思っている。だが、それもまたここまでの中間報告でしかない。旅はまだ佳境にも立ち入ってはいない。）

夕暮れも近づいてきて、客足のとだえた遊技場やいかがわしいテント小屋（客寄せの絵が奇形、障害を見せ物にするようなものだったので、入る気にはならなかった）やそろそろ店じまいをする写真屋たちの脇を通り抜け、人気の少ないバンド（沿江路）を歩いた。幅広い道路を隔てた市街側には、かつての租界時代のものだろう西欧風の立派な連物が、ひっそりと夕暮れに陰っていた。

バンドを二〇分も南下すると、租界時代からの漢口のシンボル、武漢閣があり、立派な時計台が立っている。昼に老人の案内で渡し船に乗った碼頭はその近くにあった。夕暮れ時の印象はずいぶん違って少しまどったが、同じ渡し船に乗って、武昌側の漢陽門へと渡った。

漢陽門碼頭からバス停までは、衣料品の露店がひっそりと並んでいた。そろそろ店じまいの時間も近づいているらしい。人通りの少なくなった歩道に沿って、ひもに吊るされた衣服が裸電球の明かりを受けていた。

バス停前、歩道のテーブルで焼きそば（肉絲炒粉）を食べた。

何事か口げんかをする車掌と乗客のいさかいに興味を引かれつつ、暮れ落ちた街並に目をこらす。大東門を乗り過ぎささないようにと、

露店と口げんかの多い街だ。

青島ビールと紅梅（七・五元）を買い込んで、大東門飯店へ。部屋一泊二五元、風呂、トイレ共同のシングル。

共同風呂は、時間が遅かったのか、掃除婦のおばさんが掃除をされていて入れなかった。仕方がないので、給湯所（大型の給湯器が備えてある）で頭を洗い、体を拭いた。ついでに洗濯も。同宿の中国人たちと同じように、パンツ一枚の姿で。

チャンネルが壊れて、一チャンネルだけしか映らない白黒テレビをぼんやりと眺めながら、生暖かい青島ビールを飲み始めた。